

地域博物館における学芸員と特別展

Curators and Ad Hoc Exhibitions at Community Museum

浜 口 哲 一・小 島 弘 義※

Tetsuichi Hamaguchi and Hiroyoshi Kojima

Among museum activities, the ad hoc exhibition, as the activity which effectively appeals to the visitor, has been carried out every year in museums in various parts of the country.

It might be said that the special exhibition which is carried out in the style of presenting area studies makes it possible for the visitor and the museum to share in effective learning and knowledge accumulation.

In this thesis, about three area-study exhibition cases especially executed by and at Hiratsuka City Museum, entitled “Boating and Fishing on the Sagami River”, “Various Forms of Life in or about the Sagami River” and “Invitation to Excavation,” we discuss the roles of the community museum mainly in connection with the curators’ activities according to the captions itemized below ;

I. Community Museums and Ad Hoc Exhibitions

1. General Idea of Community Museums
2. Permanent and Ad Hoc Exhibitions at Hiratsuka City Museum

II. Planning and Execution of Ad Hoc Exhibitions

1. Summary of Exhibition Series of the Sagami River Valley Research and Study
2. Process of Producing Ad Hoc Exhibitions
3. Issuance of Pictorial Record

III. Curators and Ad Hoc Exhibitions

1. Research and Study by Curators and Ad Hoc Exhibitions
2. Curators at Community Museums
3. Education-Spreading Activity and Ad Hoc Exhibitions.

はじめに

近年展示技術の向上に伴い、博物館の展示手法もバラエティーに富んできた。しかし全国的な視野で展示を分析した論文は非常に少ないように思う¹⁾。

特別展となると、その報告・論文はさらに少なく、資料の目録的な図録の発行があるくらいで終わってしまっているようである。

展示が学芸員の手で企画・実施されたものなら、そろそろ記録化し、報告しあうようなことも必要であろう。

そういう視点から、この小論は学芸員の研究成果の発表ともなる特別展を、学芸員と地域博物館とのかかわりで論じてみたい。

I 地域博物館と特別展

1. 地域博物館の概念

近年、めざましい勢いで博物館が誕生する背景には、明治百年的な面と、都市化に伴う地域の変貌と、生活にある程度のゆとりが生じて文化的施設を望む機運などがあると考えられる。

地域博物館²⁾にとって不可欠の要素に、地理的条件と地域住民の学習権の保障、さらには館側の理念と体制がある。

近年、首都圏に近い各市町村にとって、都市化の波は目まぐるしく影響を与えてきた。このような状態の中で首都圏に近い中都市にとって、都市化の危機から残され

た地域の歴史的資料や自然史的資料で地域を語らせるためには、最後の機会になりつつある。

しかも転入してきた新しい地域住民が半数以上に達したとき、ある意味では地域社会は崩壊し、全く新しい地域社会へと変質していく。その場合、今までより広範囲な地域社会へと歩むものとする。

地域博物館の活動のもとなるフィールドは、本来、今日的行政区分よりも歴史的地域社会（旧郡ほどの広がり）や昼間人口の生活圏・商業圏・文化圏の広がりが必要である。都市化の進展に伴い今後ますます広域的になり、館の機能上と利用者のメリットは、似かよってくるものと予測される。

次に利用者側にとって不可欠なことに立地条件がある。交通の便と市街地的条件を考えて設立しないと、地域住民の日常的利用からかけ離れた、観光地的利用に終り、どんなによい理念があっても館活動を始動しづらくなる。

地域住民の意識³⁾としては、余暇時間を、①テレビ・ラジオ、②休息くつろぎ、③家庭内の団らん、④家事・読書や音楽、⑤趣味・けいこごととに過しているように、余裕のある日常生活とはいきれないのが実情である。

この調査でも余裕があった場合、旅行をトップに、趣味・けいこごと・スポーツ・映画・演劇などの観賞やスポーツをするというデータが出ている。

しかし地域博物館にとっての住民との関係では、余裕があったら来るというよりも、家庭内の団らんや読書・音楽・趣味・けいこごとと同質の利用であり、まさに日常生活とのかかわりから利用されていくものと思う。

地域住民の日常的な博物館の利用を保障していくため、地域住民の多目的欲求をどのようにカバーしていくか館の理念ともからみ大切なことである。

所蔵資料上から区分する歴史博物館・美術館・自然史博物館・総合博物館・理工系博物館・動物園・植物園・水族館のうち、一般に地域資料が不可欠な博物館は、歴史博物館・自然史博物館・総合博物館である。このほかにも、美術館・理工系博物館でもそのような性格から出発する館も見られる。

地域博物館にとって、地域の博物館資料は日常的な民具・出土資料などの物質文化資料と、歴史的美術資料、さらには古文書資料等が大半を占める歴史的資料と、生物・地質などの自然史資料とからなる。

このような身近な自然と人間を考えていく資料は、地域社会とのかかわりで考えられ、研究されていくものである。地域研究とのかかわりあいにはⅢ章に譲るが、地域の基本的資料の研究はまだまだ可能性を秘めている。

このような地域の資料を活用していくためには、一つの資料を中心とする単科博物館よりも、二つ以上の複合か総合博物館の方が地域住民の欲求に応えられるばかり

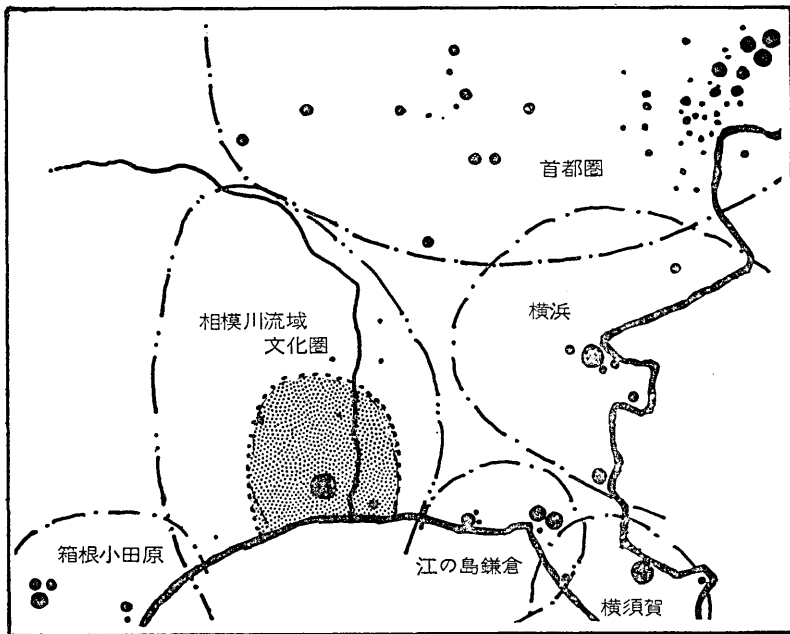


図1 神奈川県における地域社会と博物館（・印は博物館）

でなく、館の機能上からも必要となってくる。また数少ない専門家相手の研究機関でない以上、住民の学習意欲を広げられるようにし、かつ年齢や学歴に関係なく地域住民とのパイプを保つことができよう。

このような試みは今までも幾度も繰り返されてきたものと思う。しかし設立時において教育普及活動にウェイトを置くことを館の理念としていくことを提示していくとともに意欲的な学芸員の絶対数の確保が必要である。

そのため、学芸員数は、博物館資料に優先し、今後は最低 6〜7 人確保する必要がある。

意欲的な学芸員によって財政的な面のカバーをし、博物館を見る施設から体験し、観察し、博物館資料の真の活用発展していくきっかけに結びついていく。そのとき博物館が単に知識のデパートから脱け出て、新しい発見の拠点になるものと思う。

このように、地域社会と太いパイプで結びつこうと努力していくためにも、建物の広さとしては3,000㎡以上、展示室以外のレクチャールーム・特別展示室・保管・研究に必要な空間が必要である。

地域の有形・無形の資料を通じて調査研究・資料収集・保管・教育活動を推進することによって地域博物館の活動は定着するものと思う。

2. 平塚市博物館における常設展と特別展

近年の博物館振興は、神奈川県立博物館に始まる各県立博物館の新設に負うところが大きい。

また私立・公立・国立の各美術館のテーマ特別展は、利用者の便に則し、一方ではタイムリーな企画のデパート展が、展示を楽しめるものに発展させてきた。

このような背景で行われてきた日本の特別展の傾向を内容的に分類してみると、だいたい次のように類型化されよう。

A 外国資料紹介型、B 埋れた資料の発掘紹介型、C 地方文化紹介型、D 日本の○○○型、E 収蔵またはコレクション紹介型、F 調査資料発表型等になる。

特別展の規模も、国立・県立クラスの大規模なものから、地方博物館の小規模なものまで、バラエティーに富む。また展示回数にしても、恒例化している美術館の特別展から年に1〜2度の回数まで、その回数に幅を持っている。

日本博物館協会の『博物館研究』のもよおし欄から拾い出した、全国の県立25館、市立25館(美術館を除いた)の特別展からその主な傾向を探ってみた(この数字は正式調査と異なるので、実数的には、単にガイドラインの性格と思う)。

まず回数では、年4回以上の館が県立では14館、市立では6館、平均では県立では約4回、市立では約3回。また企画内容では、報告からは判断がつかないものもあるが、県立では歴史系的企画42回、自然系企画13回、美術系的企画34回、市立では、歴史系的企画28回、自然系10回、美術系32回実施されている。

このように、市立にあっては、美術的傾向が強く、自然系の特別展は非常に少なくなる。このような企画の傾向は、全て学芸員の研究成果に基づくかどうか判断できないが、自然史系スタッフが、一般に少ないことによるものと思われる。

このように毎年定期的に行なわれてきた特別展を博物館学的に整理していくことは、地域博物館にとっても、日本の博物館の発展のためにも不可欠のことである。

次に平塚市博物館の特別展を報告する前に、常設展の概要を述べたい。

本館の展示は、相模川流域の自然と文化をテーマとした、テーマ展の方式をとっている。

この常設展の企画から実施まで6年間を費やしたが、個々の大テーマはⅠ、Ⅰ 相模平野と人間、Ⅱ 道一その文化をもたらししたもの、Ⅲ 相模の自然と文化、からなる。

展示スペースは、1階541㎡と631㎡の2室よりなる。

展示の企画にあたっては、人間と自然との複合関係で考えるような視点に重点を置いて計画してきた。そのため一つの大型の古代生活復元のジオラマにしても、専門分野的には、考古・生物・地質等のスタッフ5人が加わり、特別研究員の樋口清之の指導を受けながら展示を企画し、出土資料及び遺跡のデータをもとに、復元にあたって、人類学的見地と物質文化的見地以外でも、古地形・植生の復元や、展示用の植物採集・実験考古学による竪穴住居の復元・出土資料のコピー、各種石器の復元などをもとに展示業者と一緒に完成にこぎつけたわけである。この展示を一つとっても、このように、学芸員のオリジナルな成果が反映されているわけである。

このように当館では、まず一つの資料をどのように展示するのかという視点を決め、それをもとに企画立案し、シナリオ化し図面化し、それと並行して、実験や調査収集・製作のプロセスで実施してきた。この他の各コーナーにおいても、歴史的展示を自然史担当スタッフの企画によって、複合的試みで行なってきた。

しかしながら、今後の研究の進展に応じて、改善して行きたいコーナーも多い。そのため、個々のテーマにしても、今後発展的に特別展を通じて深化をはかりカバーしていくつもりである。

特に開館時, 相模川下流域の平塚市周辺にウェートを置いたため, 研究の進行に伴って, より広範なものにしていくためにも, 特別展は不可欠である。

なお, 本館の特別展は, タイプFの“相模川流域シリーズ”を中心に, タイプEの博物館資料シリーズ, 今後計画予定の広域的企画のタイプBの“自然と文化”からなる。

このうち51年度中の特別展は合計5回, うち3回を“流域シリーズ”, 2回を“博物館資料”シリーズとして実施してきた。

企画にあたって特別展は, 学問的分野を中心としたテーマ展とし, 開館時民俗・夏期生物・秋期考古, 資料シリーズは新春民俗, 春期は美術の順で行なってきた。

本論は, このうち“相模川流域シリーズ”として実施した3回の特別展に焦点を絞りを進めたい。

II 特別展の企画と実施

1. 流域シリーズ特別展の概要

特別展の企画と実施の事例として, 当館で昨年度実施した, 相模川流域シリーズの3回の特別展について, 展示の概要を紹介したい。

(1) 相模川の舟と漁

〈展示目的〉

相模川流域の文化を考えると, 川を中心に生活してきた人々たちを見逃せない。漁具と川舟を通じて, 自然と

人間の出会いとその技術を中心に展示し, 地域文化を考えていく手だてとして企画。

〈各コーナーの構成〉

A 相模川の漁 漁法と漁具を中心に紹介

①タイトルパネル 漁法と漁具の表と遊舟の旗を展示

②モジリ漁 いろいろなモジリを量的に展示し, 魚の形をした切りぬきのガラスのマスクングによってイントロダクションの効果を演出。

③村井弦斎と釣道具 説明パネルとともに, 弦斎愛用の釣道具, 特に釣針を中心に約800点を総量的に展示。

④投網コーナー いろいろな種類の投網を展示し, さらに製作中の投網とその製作用具56点を展示。さらに建て切り網とその漁法をイラストを使って展示。

⑤ビクのコーナー 釣りからモジリ漁・舟での冷蔵庫まで, 魚を収納するビクを分類展示。

⑥ウナギ漁と漁具 いろいろな方法でウナギを獲る漁法をイラストを使い漁具を展示。

⑦その他の漁法 ウカイ漁法や釣り漁法さらには見突き漁法まで写真とイラストをまじえ漁具を展示。

B 相模川の川舟 各種の川舟の実物・模型から相模川の川舟の特徴と歴史的背景を紹介。

①日本の川舟 パネルを使ってイラスト紹介。

②相模川の川舟 多摩川・富士川の川舟模型・山中湖の川舟実物, 相模川の川舟を比較し, 構造的的特色と種類

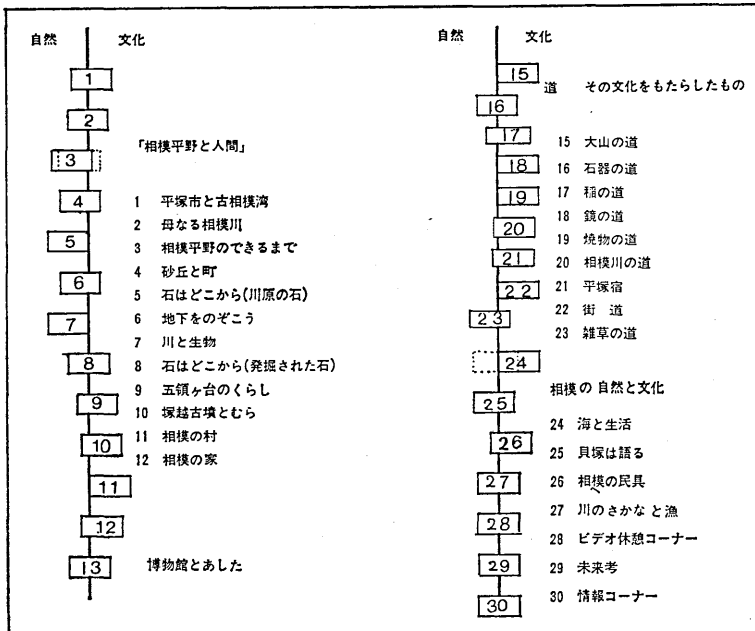
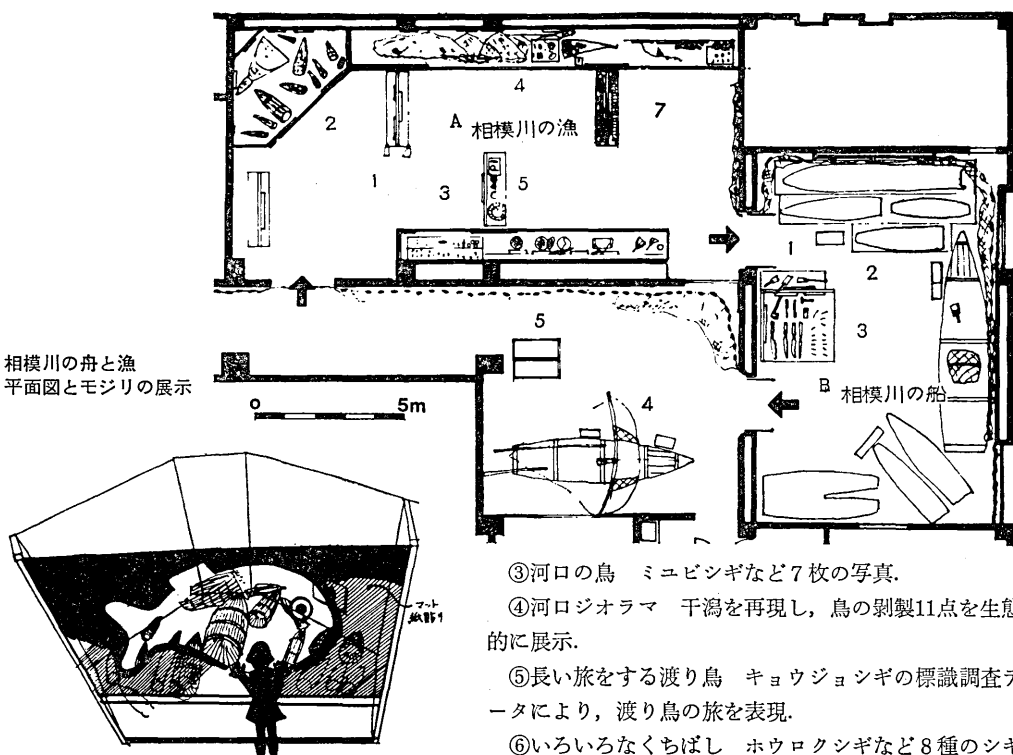


図2 平塚市博物館における常設展示の構成

図3 相模川の舟と漁
平面図とモジリの展示



と歴史的背景をイラストで展示。

③舟をつくる 川舟の製作工程写真パネルと製作用の舟大工道具をセット的に展示。

④帆かけ舟 川を漕る帆かけ舟をイラストと、写真をまじえて、実物を展示。

⑤描かれた相模川の舟 錦絵等より、その歴史的变化を印象づけた。

この他、コーナーからコーナーへのつなぎとして漁網を2ヵ所に展示。

(2) 相模川の生きものたち

〈展示目的〉

相模川の流れの中や川原は、魚・鳥・虫など数多くの生きものたちの住み家ともなっている。そうした生きものたちのくらしにスポットをあて、意外なほど豊かな自然が残されている相模川を、自然とふれ合う場、自然観察の場として再発見してみるため企画。

〈各コーナーの構成〉

A. 干潟の動物たち 相模川河口干潟の底生動物と鳥の紹介

①タイトルパネル 河口の航空写真と、干潟の干満の連続写真。

②河口の変遷 4枚の地形図で変遷を示す。

③河口の鳥 ミユビシギなど7枚の写真。

④河口ジオラマ 干潟を再現し、鳥の剥製11点を生態的に展示。

⑤長い旅をする渡り鳥 キョウジョシギの標識調査データにより、渡り鳥の旅を表現。

⑥いろいろなくちばし ホウロクシギなど8種のシギの剥製をパネルにとりつけ、くちばしを比較する形で展示。

⑦砂丘と干潟 河口の地形の断面図パネルと干潟カット断面模型を展示。

⑧泥の中の動物たち 主な底生動物11種の分類展示と、50cm四方に生息する動物の総量展示。

⑨日本の干潟 主な干潟の所在地図パネル。

B 川の魚たち

①タイトル 主な川魚のイラストパネルと、水槽で数種の魚を飼育展示。

②収集された相模川の魚 相模川全水系地図パネルと上下流で収集された魚23種を展示。

③魚を食べる鳥 魚を食べる鳥のイラストと剥製。

④相模川のフナ 2種のフナの剥製と液浸標本。

⑤魚の体 魚の剥製をパネルにとりつけ展示。

C 川原の生きものたち

①タイトルパネル

②いろいろななかま 川原の主な鳥獣、昆虫、植物を分類展示。

③川原の狩人たち クモ標本をパネルにとりつけ展示

④川原の掃除屋たち 腐食昆虫の分類展示。

⑤川原の蛾 分類展示。

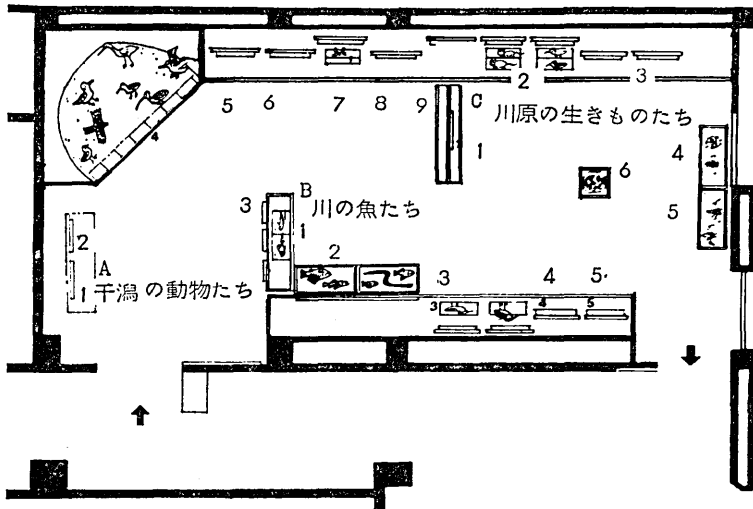


図4 相模川の生きものたち
平面図とジオラマ

⑥ヤナギをめぐる虫たち ヤナギの枝と、昆虫の標本をとりつけた写真パネルを展示。

(3) 発掘への招待 No.1—相模川流域の縄文時代— 〈展示目的〉

平塚市上の入遺跡発掘調査の成果をもとに、縄文時代の相模川流域を復元し追求してみるため企画。

〈各コーナーの構成〉

A上の入遺跡の発掘調査

①発掘の1日 4年間の調査成果を写真で展示。

②上の入遺跡 遺構断面模型を使って、土中の状態を示し、1:20のパノラマ模型で遺跡全体の広がりや集落形態を示し、さらに縄文時代の住居の構造も示した。また調査風景をジオラマ化し、発掘中の住居址からどのように遺物が出土してきたかを壊れた一括土器3個と土器片等で製作。

③縄文時代の家と道具 堅穴住居址からどのように遺物が出土し、その個体をセット的にかつ石器は総量的に展示。

④上の入遺跡出土の土器と石器

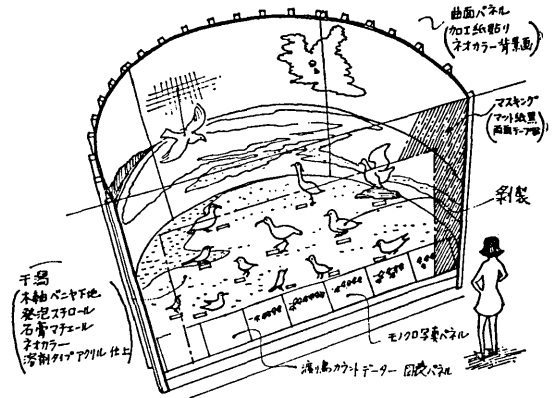
上の入遺跡出土の全石器を総量的に展示し、土器は復元完形のもの17点を展示。さらに特徴的土製品等を小ケースにて展示。

B相模川流域の縄文時代

①流域の主な遺跡地図 縄文海進期の地図に主要遺跡を図示。

②流域の各遺跡 大磯・伊勢原・厚木・相模原・茅ヶ崎の主要遺跡出土資料を、土器を中心に展示。

③流域の縄文文化 パネルに図面・写真をはりつけ、その特徴と他地域とのつながりを提示。



④縄文時代の自然 縄文時代の食物を現世の植物と対比させ、さらに食物採集の方法をイラストをまじえ展示。

⑤縄文人 土偶や土器の把手さらには、平塚市万田貝塚人骨、さらに国学院大学考古学資料館保管の縄文人全身骨等から、縄文人を考えてみた。

⑥縄文時代にせまる 堅穴住居作り、石斧・土器の使用実験、さらに流域住民の参加をつのって始めた土器作りのコピー土器等から、その技術を考えてみた。

⑦市内の各地の遺跡 五領ヶ台・万田貝塚の資料を中心に土器・石器を総量的に展示。

2. 特別展製作のプロセス

博物館のオリジナルな調査に基づいた研究発表型の特別展を行なう場合、その企画から実施までのプロセスは図6のようにまとめられる。

特別展の企画は、あるテーマに基づいた調査が、ある程度進んだ段階で立案されることもあり、また調査テーマを選ぶ時点で、特別展による発表を意識して決められ

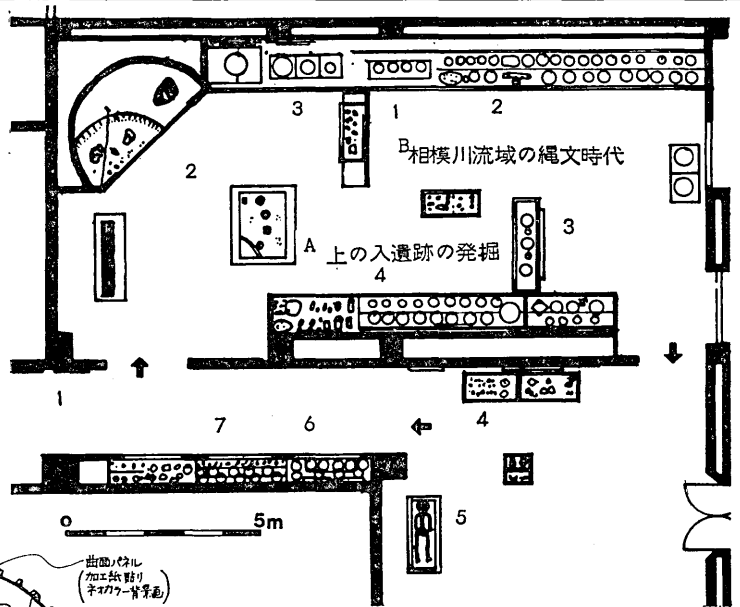
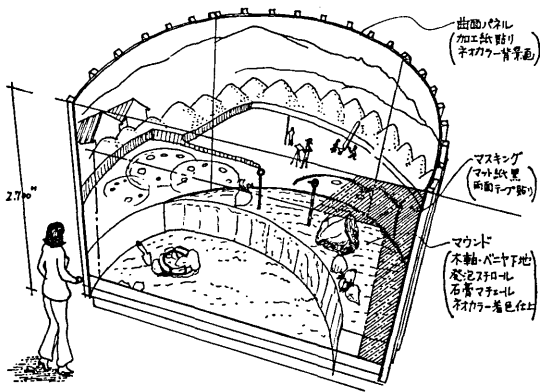


図5 発掘への招待
平面図とジオラマ



る場合もある。いずれにしても、調査から特別展までを見通した企画が必要である。

展示プランは、数年間の調査結果をふまえてまとめられる。当館では後に述べるように図録の発行にも力を入れたので、そのプランも並行して企画された。展示プランにあたっては、全体テーマ、小テーマとその構成、主な展示物、レイアウト、工程、予算などが計画される。

展示準備の過程では、模型・ジオラマなどの製作、借用資料の調査・交渉・借り出し、パネル・ラベルなど外注製作物の発注、展示資料の整理準備などが行なわれ、最終的な展示のディスプレイとなる。また、これと並行して、特別展開催のPRを行なうが、当館では市の広報紙、各学校公民館に掲示を依頼するポスター、一般新聞への情報提供によった。これらの準備が整って、特別展の開会となる。当館では、展示の最終プランから実施まで、約2ヵ月の準備期間を要した。

特別展開催期間中には、展示を有機的にいかに関連す

及行事を行なったが、これについては後に詳しくふれる。また展示についての記録も重要な作業である。観客のいる会場風景写真、展示室やパネルの完成記録写真を撮影し、借用資料については必ず写真で記録する。できれば、入場者へのアンケート調査などを行なって、特別展の評価を把握する必要がある。

閉会後の仕事としては、借用資料の返却、会場のかたづけ、資料の収蔵室への移動などの整理作業がある。

各回の特別展について、ほぼこのようなプロセスが必要とされるが、さらに詳しい工程は、当館の年報⁶⁾を参照されたい。

これらの作業は、各特別展の担当学芸員2〜3名を中心に進められたが、作業量の一例として「相模川の生きものたち」の準備のための5月10日から7月20日までの約30日間における作業を表にまとめてみた(表2)。全体では2名の学芸員が2ヵ月間専属で活動する仕事量であり、特に図録編集には、展示準備とほぼ同等の作業時間が必要であった。

3. 図録の発行

各博物館で、特別展にちなんで発行される出版物には特別展図録・リーフレット・ポスターなどがある。49年12月に当館が実施した、全国の公立博物館を対象とした出版物アンケート調査⁷⁾によると、県立では30館のうち25館(83%)、市立では44館のうち20館(45%)が特別展に関連した出版物を発行している。このうち図録も発行しているのは県市立をあわせて28館であった。

表1 特別展の概要

特別展名 内 容	相模川の舟と漁	相模川の生きものたち	発掘への招待 No. 1
展 示 期 間	40日間	40日間	40日間
調 査 期 間	60日間(5カ年間)	50日間(2カ年間)	140日間(4カ年間)
展示企画準備期間	2カ月半	2カ月半	2カ月
担 当 者 数	3人	2人	3人
展示タイプの傾向	常設展の深化タイプ	調査成果普及タイプ	初公開普及タイプ
特色ある展示手法	類型的セット展示を中心に、 川舟の展示にウェートを置く (専門の川舟大工に委託製作)	生態的ジオラマ製作や総量的 展示, さらに飼育展示, 変化 に富む資料取付けパネルなど	発掘現場のジオラマを始め, 製作模型と総量的展示と, 借 用資料によって流域として広 がりを出す
図 録 の 体 裁	アメリカンレターサイズ(206 ×202m/m) 表紙カラー・本 文1色刷48頁 有料配布(300円)	アメリカンレターサイズ(11) 表紙3色, 本文2色刷24頁 有料配布(300円)	アメリカンレターサイズ(11) 表紙2色, 本文2色刷24頁 有料配布(300円)
資 料	1064点	638点(借用21点)	805点(借用81点)
実 物	1032点 漁具 223 舟 3 錦絵 6 村井弦斎コレ クシヨン 800	599点 (借21) 鳥獣剥製(33種) 38点 (借用 21点) 魚剥製 (9種) 13点 魚液浸 (23種) 53点 魚飼育 (3種) 8点 昆虫乾燥(165種) 423点 クモ液浸(15種) 20点 その他動物の液浸 (11種) 25点 植物乾燥(22種) 595点 古い地図 4点	769点 (借81) 土器 87点(借用43点) 石器 422点(借用21点) その他の特殊遺物 47点(借用15点) 人骨 2体(借用2) 自然遺物60点 植物 (8種) 50点 土器片 100点 敷石住居復元 1基
模 型	舟 6点	2点 干潟ジオラマ 1点 干潟カット断面 1点	4点 遺跡パノラマ模型 1点 遺構断面模型 1点 発掘現場ジオラマ 1点 埋めがめ状況模型 1点
パ ネ ル	26点 タイトル 1点 主旨 1点 コーナー説明 イラスト入り 4点 イラスト 4点 写真 4点 イラストラベル12点	37点 タイトル導入 2点 図はりこみ型 2点 資料とりつけ型 17点 写真はりこみ型 2点 写真 12点 地図 2点	32点 タイトル 2点 主旨 1点 コーナー説明 (図・写真はりこみ型) 地図 1点 写真 20点
展 示 面 積	350m ²	150m ²	250m ²
時 期	開館時の初夏	夏休み	秋期
関連した常設展	相模川の道 川のさかなと漁	川と生物 川のさかなと漁	五領ヶ台のくらし 石器の道 稲の道 貝塚は語る

このように特別展図録を発行している館はかなりの数にのぼり、その性格からみても、博物館の特徴的な出版物の一つといえよう。しかし、その歴史や性格について整理した論稿はないようである。

手もとにある資料から考察すると、図録という出版物の型式は、美術館が館蔵資料の写真をのせ、簡単な解説を加えたものから始まったのではないかと考えられる。特別展が多く開かれるようになると、そこに展観された資料の写真集として図録という型式が定着し、デパート展を含めた美術展では、その発行が一般的なこととなった。これらの図録の特徴は、美術品一点ごとを写真で紹介することに最重点がおかれていることである。

現在、大多数の博物館から発行されている図録も、こうした美術展の図録の流れをひくもので、展示資料の目録的な写真集と、簡単な解説という型式がほとんどである。考古、民俗資料などを扱った特別展も多く開かれているのに、その図録は、美術品に準じた一品主義的な紹介にとどまっているのは残念なことである。こうした型式は、資料のカタログとしての意味はあり、同好者、専門家にとっては便利な面はある。しかし、鑑賞にたえる美術品の写真は別として、他分野でのこうした図録は一般読者にはあまり魅力的なものとはいえない。

一方、デパート展にちなんで発行された図録の中には、従来の枠を破るものが現われてきた。小田急百貨店で開かれた“日本列島展”“細文人展”などの図録がそれである。これらは展示資料の写真を、イラストや十分な量の解説と組み合わせて構成し、展示解説としても、また一冊の読み物としても魅力的な図録に編集されていた。

なお、図録という型式の範疇にどのようなものまで含めるかには多少問題があるが、ここでは「特別展にちなんで発行されたグラフィカルな本」を特別展図録と総称したい。

当館の場合のように、研究発表型の特別展では、資料の1点1点よりも、その組み合わせによって語らせているテーマに意味があるので、従来の一品主義的な図録は不適當である。むしろ小田急型のストーリーを重視した図録がふさわしいと考えた。さらに博物館では、デパート展と異なり、学芸員によるオリジナルな研究成果をも

りこむことができる。このような認識の上になつて、各特別展において、館のオリジナルな写真、図、情報による図録の発行に、特に重点をおいていくこととした。それらはまた、学芸員の研究成果の発表の一形態でもあり、特別展の展示記録として、館の蓄積となるものでもある。内容的には文字解説は最小限にし、写真と図で内容を語らせることを中心に考えた。こうした性格を持った図録として、当館の特色ある出版物とすることができたと考えている。

図録のページ構成の数例を写真で示してみた。製作の作業としては、写真のDPE、イラスト、2倍大の版下づくりまでを学芸員が行ない、写植文字と製版、印刷、製本を外注して行なった。このうち特に重視したのは、民具の実測図を始めとするイラストである。他館の図録に見られるように、写真を用いることは一見正確な情報を提供しえているようだが、民具の場合他地域資料との詳細な比較をしたり、その構造を理解したりするために

表2 「相模川の生きものたち」の準備を要した時間 1976.5~7
(単位 人・日 1日=8時間)

作業内容		作業日数	計
調査 (5月以降のみ)	収集	11	19
	地形実測	8	
図録編集	イラスト	24.5	54
	撮影	10	
	レイアウト指定	8.5	
	DPE	5	
	校正	3	
	打合わせ	2	
	原稿	1	
展示準備	木工事	19	54
	パネル準備	10.5	
	資料とりつけ	9	
	模型製作	7	
	打合わせ	5	
	資料借用	2.5	
	ポスター製作	1	
合 計			127

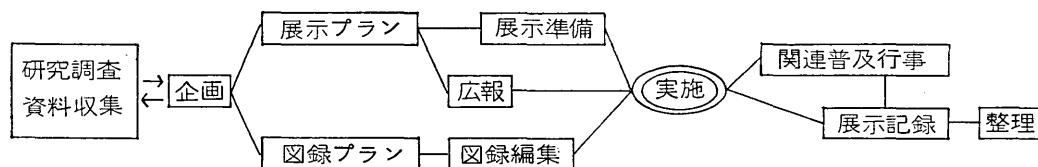


図6 特別展製作のプロセス

は実測図の方がよるかにすぐれている。その意味で、写真より図の方が博物館資料として一段すぐれたものにとらえることができる。また動物の行動を表現するのに、一枚の写真より、連続した動作を一枚のイラストにまとめたものの方がすぐれているように、どの分野でも図やイラストの有用性は明らかである。また図化の過程で、学芸員の物に対する観察眼も鍛えられる。このような意味で、オリジナルなイラストを多用した図録を企画したわけである。そのため図録の編集には膨大な時間を要したが、これらの図録は館の原図として、普及活動のさまざまな機会に効果的に活用されている。

Ⅲ 学芸員と特別展

1. 学芸員の研究と特別展

博物館活動を支える職員としての学芸員の仕事は多岐にわたっているが、その中で特別展はどのような位置を占め、また多大な労力を費して特別展を行なうことは、どのような意味のあることなのであろうか。

学芸員の活動を大別すると、博物館の機能に準じた分け方として、研究調査収集、整理保管、教育普及、管理運営の4つに整理することができる。大規模な館ではこれらの活動は分業化する方向に向かっているが、大多数の館では多かれ少なかれ、学芸員がすべての面を担っているのが現状である。

これらの活動のうち、オリジナルな館活動の条件として、研究調査活動は重要な位置を占める。学芸員の研究については、いろいろな角度から度々論じられ、新井重

三氏⁸⁾(1973)が主な論点を整理している。地域博物館での研究については、公表された論稿は少ないが、概ね2つの立場があると考えられる。一つは学芸員の研究は一科学者として自由であり、地域性にこだわる必要はないとするものであり、他の一つは、地域博物館ではあくまでその館の立地する地域をフィールドとするテーマを選ぶべきだとするものである。日浦勇氏⁹⁾(1969)は後者の立場を地方主義と名づけている。

当館では、地域博物館の任務は、地域の自然と文化を再発見し、地域住民とともに再評価するところにあると考え、学芸員の研究もその中心を地域的研究においてきた。地域的研究は、その過程で多くの地域住民の協力のもとに進められるが、研究調査された結果はさまざまな形で公開し、地域住民に考える素材として提示することが必要である。そこに地域博物館が他の研究機関と異なる使命があると考えられる。住民から資料の寄贈を受けた場合でも、それを研究資料として保管するばかりでなく、他資料と比較対照させながら展示し、寄贈者にも新しい眼でその物をふりかえってもらうことによって、初めて十分な活動といえよう。このような研究成果の住民への還元は、常設展、野外行事、出版物などさまざまな教育普及活動の中で行なわれる。とりわけ特別展は、一つのテーマに基づく研究成果を総括的に発表できるだけのまとまった展示が可能なこと、博物館の特色である資料収集の成果を生かした活動であることなどから、特にすぐれた研究発表の方法としてとらえることができる。地域博物館の学芸員にとっては、自らのオリジナルな研

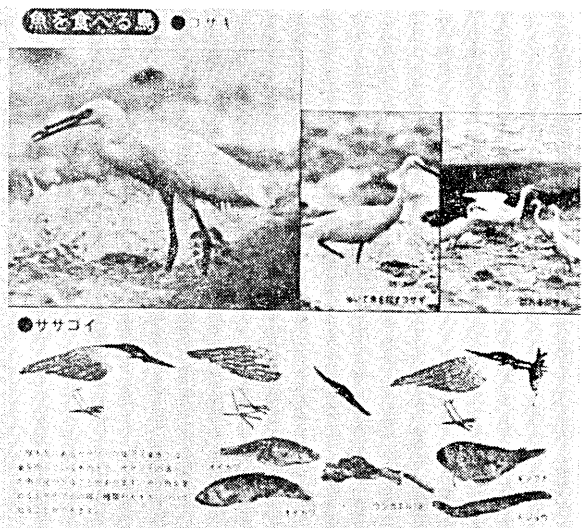


図7 特別展図録の例 左から 発掘への招待、生きものたち、舟と漁

究成果を、特別展の形で住民に問うことは、住民への義務ともいえることである。

先に述べた学芸員の4つの活動は、どれもが重要であり、館全体としても、これらの諸機能がバランスよく、しかも有機的に関連しながら発展しなければならないとされている。しかし、限られた予算やスタッフの中で、学芸員がどのようにすれば、諸機能を統一した仕事を進めることができるかといった点は、あまり論じられていない。

今まで述べてきたような研究発表型の特別展からは、一つのテーマに沿って館活動を展開し、各機能をバランスよく発展させる可能性が考えられる。例えば“相模川の舟と漁”というテーマでは、数年来民俗の調査が進められており、それに並行して収集された資料は、指定文化財への準備をする段階にいたっている。それらの調査結果と収集資料は、常設展示室の「川のさかなと漁」に展示され、さらに昨年の特別展となったわけである。

このように、学芸員は一つのテーマに基づいて諸活動を計画することによって、有機的に結びついた統一ある活動の展開を実現することができる。こうした活動のあり方を“館活動のテーマ的展開”と呼んでおきたい。

一つのテーマによる活動の展開を、模式的に示すと図8のようになる。研究調査が進んでいくに従い、情報や資料が徐々に蓄積されていく。そしてある段階で、その蓄積を生かした普及活動が計画されることになる。それには、研究者を対象にした論文による発表、一般市民向けの講演、常設展への活用などいろいろな方法がある

が、その中でも特別展が地域博物館にとって大きな可能性を持つことは既に述べてきた通りである。

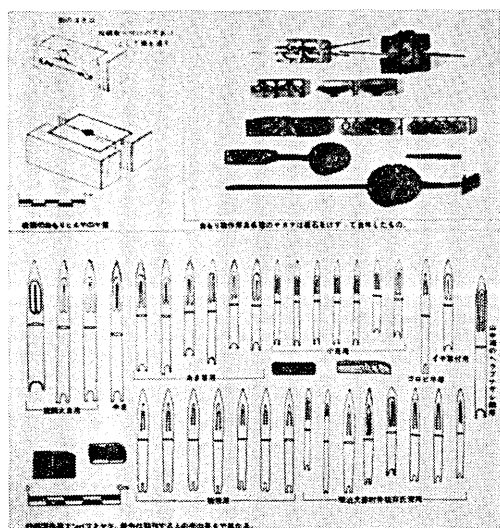
また特別展を実施することは、それを機会に資料の整理が進むこと、企画の段階で研究にも新しい展望を開く小テーマを見出すことが多いこと、市民に還元しうる調査のあり方を考える機会となることなどを通じ、その後の研究調査活動にとってもプラスになる。研究発表型の特別展は、一つのテーマに基づいた活動の発展の重要な結節点ととらえることができ、研究・整理・普及という機能を統一的に発展させる要となるべき活動といえよう。

このように、地域博物館における研究調査と、特別展を中心とした普及活動が密接不可分の関係にあるとすれば、研究調査のあり方にも一つの特徴が生まれてこよう。新井重三氏¹⁰⁾(1973)によれば、大学や他研究機関と比較した場合、博物館の行なう研究の特長として、資料の整理保管に関わる分類学や保存科学、普及に関わる教育学的研究、また広い意味での博物館学的研究などをあげる立場があるという。しかしながら、同じ発掘調査を行なう場合でも、他の研究機関と博物館では、調査法におのづから違った面が現れるはずなのである。大学などの調査が究極的に報告書や論文による発表を目的にした“論文発表型”であるのに対し、博物館はそれに加えて“展示発表型”の調査を行なわなければならない。そのため写真、ビデオなどの二次資料の組織的収集、後で述べるような意図的展示を予想した遺物の扱い、大型模型製作に備えての精度の高い実測図など様々な条件が必要となってくる。博物館における研究の特徴はまず第一にこうした点に求められるべきではないだろうか。こうした研究調査があって初めて、効果的な特別展も可能なのである。

2. 地域的博物館における学芸員

地域博物館の学芸員にとって、特別展による研究成果の発表は不可欠のものと述べてきた。実際に特別展を企画し実施していく過程では、学芸員のあり方に関わるいくつかの問題が生まれてくる。それを学芸員の職能という観点と館活動を担う学芸員集団という観点の2点から論じてみたい。

特別展を実施する過程では、学芸員にさまざまな能力が要求される。もっとも重要なのは、テーマの選定、展示の展開、図録の構成などで要求される企画力である。特別展の成功不成功はその企画によって決まるといっても過言ではないが、特に研究発表型の特別展にあっては、研究調査から特別展までの一貫した流れ全体を見通し、企画をたてることが必要になる。



この企画力は、展示の個々のコーナーについても要求されるものである。たとえば、発掘への招待では、遺物の出土状況を表現するため、つぶれた土器を土とともに展示することを 행なった。こうした意図的な展示は、調査が行なわれる時点で、すでに展示法が想定され、それにふさわしい収集が行なわれない限り不可能である。相模川の生きものたちでは、干潟の泥の中の小動物を展示するのに、ある面積に生息する全動物を総量的に展示して、形の小さい資料を見えのある展示とすることに成功した。地域資料を扱った展示では、こうした展示法の工夫によって、資料を魅力的に見せることは不可欠なことで、その意味でのオリジナルなアイデアと企画が必要なのである。

また、効果的な展示を行なうためには、さまざまな展示技術が要求される。3回の特別展では、予算上の制約から、学芸員の手仕事で製作した展示物がかなりの部分を占めたが、展示にたえる模型などを製作するには、それなりの知識と技術が必要であった。たとえば、ジオラマの製作にあたっては、仮設壁体製作のための木工技術、経師技術、石こうや塗料を扱う技術などが必要となった。クロス、紙、ガラス、アクリル、接着剤などを含めた樹脂など各種の素材についての知識と扱う技術、写真技術、レプリカ製作技術、資料保存についての知識なども欠かせないものである。図録の編集にあたっては、写真関係のほか、レイアウトや編集の技術も必要となってくる。

こうした点から考えると、学芸員はその活動を遂行していくために、通常いわれる研究者としての職能だけでなく、企画者としての職能、技術者としての職能をあわせ持つ必要があるとみることができる。活動と職能の関係は図9に示したが、どの活動をとっても、3つの職能が発揮されなければならない。企画者、技術者としての側面はともすれば忘れられがちだが、学芸員の活動のうちでは重要な位置を占め、正當に評価されるべきと思う。学芸員自身も、効果的な館活動を進めていくために、これら3つの職能の向上に意欲的にとりくむことが必要であり、特別展はその能力を発揮する絶好の機会といえることができる。大規模な館では、これらの職能についても分業化が進められており、特に技術者としての面については木工、写真などの専門職員を配置している館も多い。また小規模な館でも、外部への委託という形で職能を分化させ、研究は大学の研究者へ、技術は展示業者へという例も見られている。しかし、オリジナルな活動を目ざす地域博物館では、研究から展示企画・展示製作までに

学芸員が一貫してあたり、研究成果を生形の形でいかしたタイムリーで機動力のある展示を行なう方がより望ましいと考える。そのためには、技術面の手仕事も学芸員が担っていく覚悟をしなければ、現実の条件の中では、特別展の開催も難しいだろう。

特別展を実施していくうえで、学芸員の3つの職能が必要であることを述べてきたが、特別展はその作業量からいっても一人の学芸員がそれを担うことは不可能であり、学芸員集団の協力ということが問題となってくる。当館では、各特別展について2~3名の担当を決め、その学芸員が中心となって作業を進めた。担当は各分野を専門とする学芸員と、美術担当の学芸員の組み合わせとした。特に、展示設計製作についての技術のある美術デザイン担当の学芸員が常に加わったことが、展示のレイアウトや図録の編集のうえで大きな力となった。特別展を行なうことを計画している館では、ぜひ必要なスタッフということができるだろう。さらに木工事など、作業量の大きい仕事には全学芸員が協力してあたってきた。

また、特別展で展示したものの中には、専門分野にまたがるような視野から展示したものもいくつかある。

“発掘への招待”では、出土した石器の材質を地質担当学芸員が同定したり、炭化植物を生物担当学芸員が同定し、現生標本と対比させたりすることによって特別展を学問的に豊かな内容に発展させようとしてきた。こうし

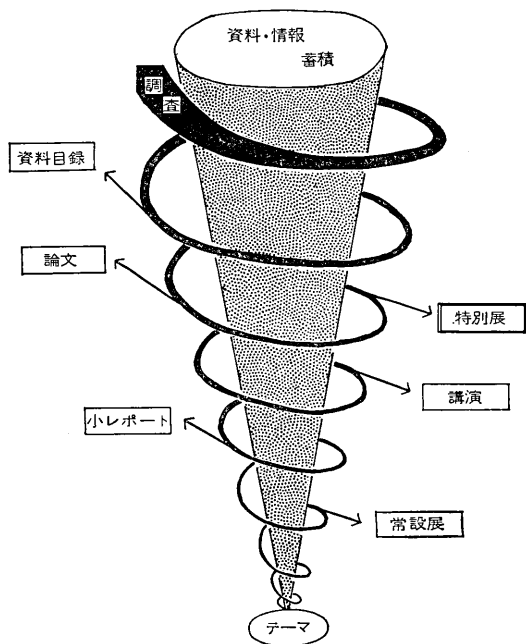


図8 館活動のテーマ的展開

た試みは、総合博物館として、各分野の専門的視点を複合させた展示や研究を意図している当館では、積極的に実施しようとしているものだが、その前提には十分なスタッフと、その協力態勢が必要となる。

このように特別展を実施するためには、各学芸員が専門分野を越えて、学問的にも、作業的にも協力しあうことが不可欠の条件である。学芸員集団が組織として、特別展をはじめとする館活動を効果的に担っていくためには、学芸員間にいくつかの共通理解が必要である。第1は、館活動全体を統一するテーマがあり、それを各分野の学芸員が学問的に協力しあう基盤とすることである。当館では、“相模川流域の自然と文化”が館全体のテーマとなっており、“相模川流域シリーズ”の特別展も、この大テーマのサブテーマとしてお互いに関連性を持って考えられているわけである。第2は、全員が、博物館を機能的に運営していくという共通の基盤にたって物を考え、できる限り調査体験の交流をはかることによって相互理解を深めることである。

今まで述べてきたように、特別展を学芸員が行なう活動の一つとしてとらえたとき、そこには一つの学芸員像が浮かびあがってくる。それは研究者・企画者・技術者という3つの職能に意欲を持ち、専門分野を越えた協力を惜しまず、集団として館活動を支えていくような学芸員である。筆者らは、こうした学芸員像が、地域博物館の発展を支えるものと考えている。

3. 教育普及活動と特別展

博物館の行なう教育普及活動にはさまざまなものがある。芹沢俊介氏¹¹⁾(1976)は、自然史系中小博物館における教育活動の構成を、手段と対象の組み合わせで整理して示している。その分類に従えば、当館の普及活動は主に関心レベルを対象としており、博物館資料によるものとして常設展と特別展、印刷物によるものとして図録・テキストなど、直接コミュニケーションによるものとして、室内での講演会・映画会・体験学習シリーズ・プラネタリウム・野外での自然観察会・星を見る会などがある。また連続講演会・古文書講読会・博物館資料シリーズは、勉強レベルを意識したものであり、年報は博物館学的な研究レベルを対象としたものである。

特別展は、これらの活動の一翼を担うものであるが、研究発表型の展示で、しかもオリジナルな企画をもちこんだものであるため、勉強レベル、研究レベルの入場者の観覧にもたえる内容になっている。事実、特別展期間中は、かなり広域的な同好者・研究者の来場があった。

また一つの特別展を実施するにあたっては、その展示

をより効果的にいかすため、関連した普及行事を計画した。「相模川の生きものたち」と「発掘への招待」に関連して実施した行事を図10に示した。

前者では、展示した地域資料を、より広域的な視点からとらえることができるよう講演会と映画会を行ない、一方で実際の川での生きた自然の観察と結びつけるための観察会を行なった。この観察会では、野外での観察後館に帰り、展示解説と結びつけるような方法も試みてみた。

後者では、講演会のほか、館で調査中に普及用として撮影してきたスライドとビデオの映写会を行なった。発掘調査中にも、見学会を実施してきたが、調査と普及の不可分の関係はこうしたところとも現われている。また屋外に行なった住居址の復元は、特別展後も常設的な屋外展示として公開しているもので、特別展が館の資料をふやすきっかけとなった一例である。

このように、特別展は、それを取りまく関連行事を有機的に企画することによって、多彩な普及活動の中核とすることができる。一つのテーマによる集中した普及活動は、参加者に対してくり返しによる強い印象を与えることができるものと考えられる。こうした活動の構成は研究発表型の特別展を中心にした場合にのみ、無理のない形で実施できるものである。

倉田公裕氏¹²⁾(1977)は学芸員のタイプを学問志向型と教育志向型に類型化し、前者は学問的業績や初演展示に興味を持ち、後者は知識の創造より伝達に関心があって独自の研究や展覧会は得意でない¹³⁾と論じている。しかしながら、本論で論じてきたように、研究と教育を表裏一

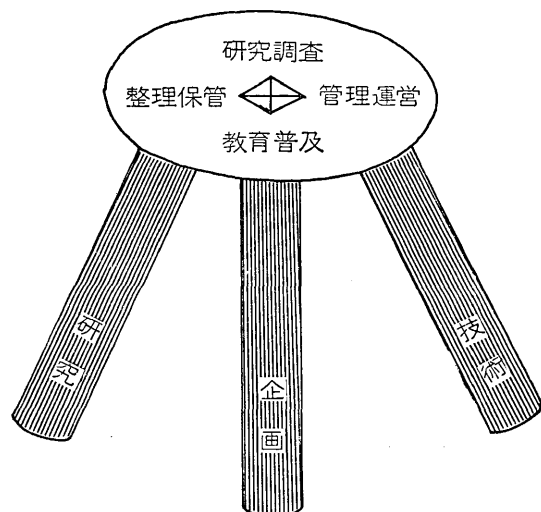


図9 学芸員の活動と職能

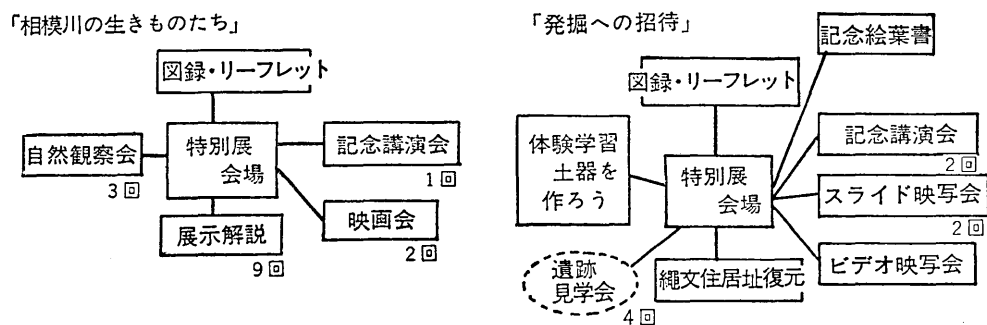


図10 特別展の関連普及行事

体のものととらえ、一つのテーマによる研究から特別展、さらにその関連行事という一連の流れの中で、オリジナルな研究成果を伴う有機的な館活動の発展を旨とする行き方もあることを指摘しておきたい。

おわりに

特別展は、博物館の教育普及活動の中でも華やかな行事として、多くの館でひんぱんに実施されている。にも関わらず、それを館活動の中でどのように位置づけるかを論じた例は少ない。

そこで、筆者らが勤務する平塚市博物館での事例を中心に、地域博物館における特別展について、学芸員の活動との関連から論じてみた。研究発表型の特別展が、研究調査と資料収集の成果を地域住民に発表する場として正当に評価され、積極的に実施されるように望みたい。

最後に、そのような意味で効果的な特別展を実施していくための条件をまとめておきたい。第1は建築上の部屋の確保である。特別展示室の設計については小島(1976)、平塚市博物館年報(1977)を参照されたい。第2は十分な学芸員スタッフの確保であり、その学芸員は研究者・企画者・技術者の3つの職能において意欲的でなければならない。第3は館のオリジナリティーを重視した活動とすることである。第4は、特別展を学芸員の研究発表の場として位置づけ、業績として残る出版物を必ず発行することである。その出版物としての図録の可能性については本文中で述べた通りである。

労を分かちあってきた、菅間荘館長をはじめとする平塚市博物館のスタッフに、深く感謝したい。

(はまぐち てついち・こじま ひろよし

: 平塚市博物館)

※Hiratsuka City Museum

〔註〕

- 1) 小島弘義 1976年「わが国の物質文化博物館—その現状と課題—」『民具マンスリー 9巻5号』
- 2) 小島弘義(1976年「地方博物館の建設プランニング」『博物館学雑誌』1巻2号
- 3) 平塚市総務部行政課統計調査係 1977年『平塚市住民実態調査結果』
- 4) 平塚市博物館 1977年『平塚市博物館年報1号』
- 5) 註4)に同じ
- 6) 註4)に同じ
- 7) 平塚市博物館建設準備室 1975年『博物館出版物についてのアンケート調査報告』及び『平塚市博物館年報』第1号
- 8) 新井重三 1973年「博物館における「研究」の性格と機能的に見た博物館の分類」『博物館研究』No. 63
- 9) 日浦 勇 1976年「研究と展示」『大阪市立自然科学博物館報』2
- 10) 註8)に同じ
- 11) 芹沢俊介 1976年「自然史系中小博物館における教育活動の構成」『博物館学雑誌』1巻2号
- 12) 倉田公裕 1977年「学芸員のタイプとその集団」『博物館研究』Vol. 12 No. 3

本稿を作成するにあたり、特別展実施のためともに苦